

## 編集を終えて

挿絵作家 くま えみこ

2017年、冬。私が初めて天野さんにお会いした時は、すでに禁漁の時期に入っていた頃だった。その頃、天野さんは絵画制作の最中で、部屋の中には描きかけの大きい絵画があった。その風景の中で印象的だったのは、「筆立て」である。その「筆立て」はプラスチック製のパイプを7~10cm程に切って立てたものだった。それが幾つも立ててあり、それぞれに色名を記し、色ごとに筆を使い分けているのだとわかった。この「筆立て」を見ただけでも、天野さんが如何に工夫好きで、好奇心と探究心の持ち主であるかが見て取れた。

私は天野さんの絵画から、生きている鮎を描くには、川の中の鮎を、常に鋭く観察していることが何より重要だ、と思い知った。天野さんは描くために観察しているわけではなく、鮎と共に生活をし、鮎の存在が身体や心に染み込んでいるからこそ、滲み出るように鮎を描くことができるのだ。それはどのような絵を描く場合でも同じである。絵画とは自己顕示ではなく、題材から「描かされる」ものだと、私は実感した。

鮎を獲ることが鮎漁ではあるが、「鮎を想う」天野さんの考え方はとても興味深い。鮎が生活しやすい環境を残したい、そのような想いは鮎漁をしているものだけでなく、その町に暮らすもの、さらには川の上流部に住むもの、山の保護に関わるもの、全員で取り組んでいかなければならない問題なのだと思う。

私の母校、高宮町立川根小学校（現、安芸高田市立川根小学校）には、在校当時「わかあゆ学習」という課外授業があった。週に一度の1時間目から4時間目の「わかあゆ学習」は、1、2年生時は「牛飼い」、3、4年生時は「川漁」、5、6年生時は「炭焼き」という授業内容だった。私の世代はいわゆる「ゆとり世代」の一手前ではあるが、川根小学校が独自の授業を行っていたことは、

町外に出て初めて気がついた。将来この町に残り、町の仕事を伝承してほしい、という思いが込められた教育内容であったのではなかろうか。当時、小学生の私はもちろんそのようなことは考えてはいなかったが、教室の外に出られる「わかあゆ学習」はとても楽しみなものだった。この時の川漁の授業では、早朝に先生、親たちと出かけ、仕掛けておいた刺し網を取りに出ることもあった。（親になった今考えると、親も大変だっただろう…）ウナギが獲れたことは今でも印象に残っている。綿糸で刺し網を一から編んで作る授業もとても楽しかった。

町外に出て、地元川根には在住していない私だが、このようなお仕事をいただけたのは「わかあゆ学習」のおかげではないかと思う。今では考えられないような授業内容を組んで下さった方に、この本を是非読んでいただきたいと願う。

私がこの仕事に取り組んだのは35歳。天野さんが川漁を再スタートされた35歳と同じ年である。エッセイの中で「35才くらいまでに出来るだけ多くの仕事を体験したい。それから生き方を考えても遅くない。」とあり、私はこの言葉にとっても勇気付けられた。私も色々な仕事をしてきて、天野さんと同じような思いで取り組んできたので、「これで良かったのだ」と感じると同時に、この度の「我が鮎獲り物語」の仕事によって新たな道が開けた気がした。

最後に、忍耐強く私の質問に答えてくださった天野さん、信頼して仕事をお任せくださった今井さん、この仕事を紹介してくれた父、何度も取材に同行してくれた母、文章の校閲を手伝ってくれた義姉、そして、多大な協力をしてくれた息子と夫に感謝申し上げる。